

# 金銅製品が出土した石見地域東部における重要拠点

平ノ前遺跡（大田市、2016・2017年調査） 伊藤 智

近年開催された東京や北京のオリンピックでの世界各国のアスリートによるパフォーマンスに、心躍らせた事は記憶に新しいところです。アスリートたちの栄冠を象徴するのが、金、銀、銅に輝くメダルであり、その美しさには我々も魅了されます。しかし金属の光り輝く様に惹かれるのは現代に生きる我々だけではなく、いにしえから人々の心を魅惑してきました。

今回紹介する平ノ前遺跡（大田市静間町）からは、金色に輝く装飾品である金銅製の「歩揺付空<sup>ほよろつきうづつろ</sup>玉<sup>だま</sup>」が出土しました。これは県内でも他に安来市の横穴墓出土例しか知られていない非常に珍しいもので、当時の新羅（朝鮮半島南東部）で製作され、遺跡にもたらされたものと考えられます。新羅の王墓からは、数個の金銅製空玉に糸をとおして装飾された首飾りや耳飾りが出土しており、三国時代の新羅や高句麗を舞台とした韓流ドラマでも、黄金に輝く装飾品を身に付けた高貴な人物が登場するのを目にします。

この金銅製品は、古墳時代の灌<sup>かんがい</sup>漑用の水路跡から出土しました。調査員だった私は、スコップで慎重に水路の中を掘り下げていましたが、何の前触れも無く土の中からキラッと金色に光る小さな空玉が出土したときは、一瞬何かキーホルダーでも落としたかなと錯覚するほどでした。



平ノ前遺跡遠景 向こうに見えるのは日本海



金銅製歩揺付空玉 空玉の直径は約1 cm

しかし、誰がこの空玉を入手し、なぜ水路跡から出土したのでしょうか。平ノ前遺跡は、三瓶山や石見銀山遺跡付近などから流れる静間川の河口付近に立地しています。つまり当時の日本海水運の中継点や、静間川上流部への開発拠点であったと推測され、この地を治める人物は金銅製品を保持することもできる、かなりの有力者だったといえます。水路からは、他にも九州有明海北部沿岸地域からもたらされた土器や、出雲地域や石見地域西部の特徴をもつ須恵器、勾玉など多種多様な遺物が出土しています。これらの遺物は、灌漑用水路で執り行われた水辺の祭祀に用いられたとみられ、農耕作業にかかわる祭祀の他、水上交通や災害、事故・事件に伴う安全祈願・鎮魂の場であったことが推測されます。

このほか、遺跡からは花仙山産碧玉（青めのう）をもちいた出雲の工人による玉作りや鉄製品加工の痕跡、有力者の居館跡とみられる大形建物跡などが見つかりました。いずれにしても、平ノ前遺跡で行われた祭祀は、一つの集落レベルではなく、静間川上流域一帯にも影響力を持つ有力者による、大勢の人々が行き交う場で行われた大規模なものであったと考えられます。まさにこの小さな金銅製品は、平ノ前遺跡が石見地域のみならず、出雲地域や北部九州、さらには朝鮮半島とのつながりもうかがえる、日本海沿岸地域の重要拠点であったことを物語っているといえるでしょう。

オリンピックの表彰台では輝くメダルを手にしたアスリートたちを目にしましたが、いにしえの大田市域にも光り輝く装飾品を手にし、それを祭祀に用いた有力者が存在したことに思いをはせるのもいかがでしょうか。

（島根県埋蔵文化財調査センター企画員）